

KAS

Cotton こっとな Up あっぷ

Vol. 102



(詳しくは本文にて)

ふあずで練習。
タミーの魚を使って…。



魚市場で
本物のうるめいわしを…

でも作業方法是一緒。
初回からひとりで安心して
行ないました！！



目次

- ・「ニーズ」 理事長 佐藤哲也 《2ページ》
- ・「W・D・S・N 25 (Watage Daily Support News)」
～沼田さんの魚市場挑戦記～ 《3～4ページ》
- ・「お～い！ごと～く～ん！」 《5ページ》
- ・後援会のご案内・決算報告 《6ページ》
- ・編集後記 (編集部) 《6ページ》

発行人 神奈川県自閉症児・者親の会連合会
代表者 内田照雄 〒243-0035 厚木市愛甲2-11-6-109
(毎月1回15日発行) 購読料1部 15円

ニーズ

理事長 佐藤哲也

今年、全国的に桜の開花と満開の時期が記録的に早まりました。4月初めにさくら祭りを企画していた関係者は、大あわてだったのではないのでしょうか。例年に比べ、強風が吹き荒れる日もなく、開花後は比較的気温の低い日が続いたこともあって、長い間、楽しむことができたのはありがたいことでした。

私たちは日常生活の中で、ニーズという言葉をよく使うことがあります。この言葉は、必要なもの、要求などの意味があり、私たちが生活をしていく上で感じる「満たされない状態」のことを言います。メーカーなどでは、綿密に市場調査を行い、消費者のニーズの掘り起こしに躍起になっています。メーカー側にしてみれば、自社の生き残りを賭け、他社との差別化を図らざるを得ないということはよく分かります。しかし、消費者側にとっては、めまぐるしく繰り返される新商品ラッシュに、へきえきしている人もかなりいるのではないのでしょうか。これは消費者の本来のニーズとはちょっと違うような気がします。

今、スマートフォンはスマホと呼ばれ、若い人たちを中心にすごい勢いで普及し続けています。家電量販店では、従来の携帯電話は隅っこに追いやられてしまい、スマートフォンに売り場を占領されています。先日、ガラパゴス・ケータイという言葉があることを知りました。ガラケーとも言うそうです。私はこのガラケーという言葉聞いて少し嫌な気分になりました。それは私が、「時代遅れの古い物」という意味に捉えてしまい、「新商品になじめない年寄りを使う携帯電話」をイメージしてしまったからです。ところが、ガラケーを調べてみると、「日本の携帯電話は、世界市場では技術的に傑出しているが、世界標準とは無縁の状態になっており、世界市場での競争力がない。孤島ガラパゴス諸島で独自の進化を遂げ、固有種となった生物に例え、ガラパゴス・ケータイと揶揄される」ということを知りました。しかし、スマートフォンはそれほど多くの人に本当に必要なのでしょうか。普通の電話とメール機能だけでも十分な人も多いはずですが。世界標準にすることは、大事なことだとは思いますが、急速に高齢化が進んでいる日本では、多機能装備の新商品開発とともに、安心して使える従来型商品を守っていくことも大事なことでないのでしょうか。

一方、私たちの周りに目を向けてみると、「自閉症を伴う人たちも、地域社会の中で豊かに暮らしていきたい」というニーズが存在します。これは時代の変化に流されることのない大事な柱として、私たちは肝に銘じています。

私たちの法人では、ご家族の高齢化が進みつつある現状に伴い、地域生活緊急時対応、利用者送迎の多様化、永住型ケアホーム開設などが優先度の高いニーズになってきました。私たちはこれらの声に少しでも応えていけるよう、長期事業の中で事業目標を設定して取組んでいます。また、役割を担う機能として、法人の健全な経営並びに将来の展望を視野に入れた職員の人材育成を非常に重要な課題として位置づけています。私たちは、「必要とする人に 必要とする場で 必要とするサービスを」を私たちの法人に対する大切なニーズとして捉え、皆様のご支援を賜りながら努力していきます。

「W・D・S・N 25 (Watage Daily Support News)」

～沼田さんの魚市場挑戦記～

2013年も早3ヶ月経ち、4月になりました。入学や就職と新たな環境でそれぞれスタートを切る方も多いかと思えます。新しい環境に飛び込むということは、同時に、緊張や不安、期待と色々な感情が巡るものでしょう。昨年、新しい環境に勇気を持って飛び込んだ、ふぁずの利用者の方がいました。今回は、横須賀魚市場という新しい環境での作業に挑戦した沼田さんをご紹介します。

※ 横須賀魚市場での作業とは...

以前にも、こっとなあっぷにてご紹介したことがあります。一昨年からは燻製魚「いぶりっぎょ」の袋詰め作業を請け負っています。利用者と職員が、横須賀魚市場まで出向き、海の男たちに囲まれつつ、汗を流しています。「いぶりっぎょ」はとっても美味☆

☆ 魚市場へ行く前に...

まず、沼田さんに横須賀魚市場での作業に挑戦することをお伝えしないとイケません。一昨年、初めて作業を受注した時、わたげの利用者の方には、ビデオで魚市場の様子を観て頂きました。沼田さんには、わたげの利用者の方が魚市場で仕事をしているビデオを観てイメージを持ってもらうことにしました。ビデオを観て頂きながら「ここが魚市場です。ここで作業をします。」とお伝えし、どんな作業をするのか、口頭で説明して行きました。すると、じっとビデオを観ていた沼田さんは、「わかった、はい！」と力強い返事をしました。

そのような沼田さんの様子から、職員も心強く感じました。でも、初めての場所で、なおかつ初めての仕事を行う緊張感はとても大きなものだと思います。そこで、沼田さんがもっと自信を持って、魚市場に向かう事が出来るよう、ふぁずで魚市場の作業を練習してもらおうと考えました。

☆ ふぁずで練習！

燻製にした魚を袋詰めする作業工程は、次の3つです。①『魚を入れる袋にバーコードなどシールを貼る作業』、②『適切な重さの魚を袋に詰めていく作業』、③『その袋を真空パックする作業』です。(詳しくは、こっとなあっぷ97号をご覧ください。)

①『魚を入れる袋にバーコードなどシールを貼る作業』は、過去同様の作業に取り組んだことがあり、沼田さんも得意としていました。また③『袋を真空パックする作業』は、魚市場にある機械を使用するため、ふぁずでは出来ません。

そこで②『適切な重さの魚を袋に詰めていく作業』をふぁずで再現し練習することにしました。右上の写真のように、燻製の魚と同じように一つ一つ大きさや重さが異なるダミーを用意し、魚に見立てました。それをデジタル計量器に乗せた容器に移していき、示した重さまで計るという手順で行いました。

指定された重さを越えてしまった場合、容器からダミーを1つ取り、それよりやや小振りのダミーと交換するという、とても複雑な判断を必要とする作業です。でも、沼田さんは、1度職員が見本をお見せしながら作業方法を説明すると、すぐに理解していました。



と、思いきや、計量器に指定された重さまでダミーを乗せた後、職員に対して、重さが正しいか、という確認がありました。計量器に乗せられた重さは完璧です。しかし、沼田さんにとって、計量器を使った作業は初めての経験。不安があるようで、作業中もチラチラと職員の顔を見ながら行っていました。そんな時は、職員のエンジェルスマイル(笑)で「素晴らしい」と、お伝えします。すると、初めは不安そうな表情で行っていた沼田さんも回数を重ねる毎に、段々と集中力が増し、5回目からは、職員に確認することはなくなりました。



☆ いざ！魚市場！

ついに魚市場での初作業の日がやってきました。車に乗り込みいざ出発！魚市場に到着後、沼田さんは、キョロキョロと周囲を見ていました。初めての魚市場...緊張していたのかもしれませんが。職員は得意のエンジェルスマイル(笑)で沼田さんに話し掛けました。「沼田さん！今日は、よろしくお願ひします！」

魚市場のスタッフの方に挨拶をして、作業に取り掛かりました。得意なシール貼り作業を行った後、ふあずで練習した魚を袋に詰め、計量していく作業に移りました。ふあずと同じように、計量器を使用して、魚の重さを測っていきます。最初に一度だけ、重さを職員に確認することがあり、職員は「ふあずで練習した通りですよ。とても上手です」とお伝えしました。すると、笑顔になり、その後は手を止めずに行っていました。新しい環境での作業に、本人も集中力アップ！といった様子で、ふあずで行った時よりペース良く、終始自信に満ちた表情で取り組んでいました。

☆ その後の沼田さんと職員が感じたこと

その後、沼田さんは魚市場での作業に3回参加しました。魚市場のスタッフの方から、袋を真空パックする作業を急遽お願いされることもありましたが、柔軟に変更を受け入れ、取り組んでいました。

自閉症の方は変化が苦手と言われることが多々あります。しかし、必要な経験を積むことで、新たな環境にもスムーズに順応することが出来ます。私は、沼田さんの挑戦を通して、むしろ新しいことに挑戦する気力に満ちた人達だと実感しました。もちろん、それに伴った不安や緊張は感じていると思います。沼田さんも、初めて計量器を使用して作業をした時、初めて魚市場に行った時など、不安を感じている様子が見られました。そんな時、支援者が「沼田さんなら、大丈夫」と自信を持って接することで、ご本人も安心感を持つことが出来たのだと思います。

今後、魚市場で活躍する沼田さんに期待しています！

竹内祐輝



『お~い、ごとくーん!!』

今年、桜の開花がとても早かった。数年前には、山桜の花びらが風に乗って飛んで来るのが施設の窓越しに見えて、春の風情としてとても心地よいと、この時期に書いた記憶もあるのだが、今年もう既に散ってしまった。

「はやい」という言葉からふっと思い浮かんだのが、最近読み返した雑誌の雑学記事である。『地球は猛スピードで自転しているのに速さを感じないのはなぜ?』というものである。雑誌によれば、地球の自転のスピードは、日本においては時速1370km、赤道に至ってはなんと時速1700kmにも及ぶそうである。これほどのスピードで回っているのに毎日は、静かに過ぎてゆくから不思議である。猛スピードでも振り落とされないのは、地球の引力のお陰。そして、動いていることを実感できないのは、地球がそれだけ滑らかに動いているからだ。スピードというものは、外の景色が飛んでいくのを眺めたり、風をビュンビュン受けたり、発進、加速、停止する時に体がゆれたりする時に感じるもので、地球がもし、時々スピードを変えたり、止まったりするのであれば、よくわかるのだが ということだ。しかし、人は見たものから想像したり、判断したり、信じたりする部分が多いので、そう言われても、実感し難い現象のひとつである。

当法人も、早いもので、もう17年目を迎えている。開所当初に比べると、社会のいろいろな流れが早く、「急いで」と常に急かされているような気がしてならない。携帯電話やパソコンの普及のせいなのだろうか。電話で話したい時に、メールで伝えたい時に、情報が欲しい時に、(どこからでも相手の都合とはあまり関係なく)、やりとりが可能になった。中高生の間では、メールをすぐに返信しないと仲間外れにされるような危機感があるとさえ聞く。常に今を生きていなければならぬような、苦しさを感じることもある。相手を思いながら、伝えたい気持ちを温めながら、自宅に帰って電話をすとか、手紙を書くとか、その相手に届くまでの時間の中に、人として大切なものがあつたように感じる。すっかり待つということが、苦手な社会になってしまった。しかし、私たちの支援の中では、待つことがとても大切である。支援者の働きかけに対して、利用者の反応が出るまで待つこと、急いで決めつけてしまわないこと、何度でも、繰り返し挑戦する機会を作ること。法文化された意思決定支援の本質も、このようなことではないのだろうかと感じている。今年度も少しでも利用者の生活の質が向上するよう、職員一同研鑽を積みしたいと思います。

わたげ 施設長 後藤博行

